70 経済学を越えて

K・E・ボールディング

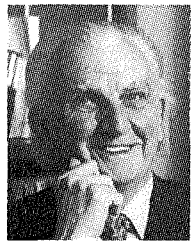
Beyond Economics : Essays on Society, Religion, and Ethics, 1968, Kenneth Ewart Boulding

恐らく経済学者の多くは、無数の人々の意識と行為の連関として社会が形作られていることを否定はしないだろう。だが、いざ自分が分析を行う場面になると、極めて単純化されたモデルに分析対象を置き換えてしまうことをためらわない。しかし、少数ではあるが、幾人かの社会科学者はその時点で立ち止まってしまう。ケネス・E・ボールディング（一九一〇～九三）もその一人である。彼はイギリスに生まれ、オックスフォード、シカゴ、ハーヴァードという三つの名門大学で教育を受けた俊才である。彼は最初エジンバラ大学助講師であったが、後にアメリカに移った。一九四九年から七七年まで、ミシガン大学教授、以後コロラド大学で教鞭を執り、九三年春、惜しくも死去した。当初、ケインズ経済学と新古典派経済学の両分野で研究を進めていたが、途中から違った道を歩き始めた。

ボールディングは、社会現象を個々の主体の複雑な相関関係として捉えただけでなく、歴史の経過とともに変化していくその関係を記述する手段を模索した。彼は、物理、生物、化学、経済、政治などにおける現象は、すべて個々の要素の関係によって構成されていることに着目し、それらは分野に関係なく一般的なシステム概念を用いることによって記述が可能であると考えたのである。

彼は、社会をポピュレーション・システム、交換システム、脅迫システム、学習システムの四つのサブ・システムに分類し、それらのシステムはすべて、必然性、偶然性、そして自由性という三つの要素からなっていると考えた。ポピュレーション・システムとは、人間や財など一定の種類の集合要素の増減のメカニズムをもって把握される体系のことである。このシステムでは、社会の要素をある程度のまとまりでもって把握するため、関係性は単純化され理解は容易である。ところが単純化された図式ではそこにある個々の要素の具体的な関係の意味が見落とされてしまう。そのため、ポピュレーション・システムの中にある具体的関係に目を向ける必要がある。

経済において取り上げられるべき具体的関係とは交換システムである。交換システムは、物々交換であれ貨幣的交換であれ基本的には「もし君が何かよいことをしてくれるならば、僕は君に何かよいことをしてあげましょ



う」というプラスーサム・ゲームである。ボールディングによると、この交換システムの中にある様々な概念、たとえば均衡価格は先の三つの要素を持っている。均衡点に価格が決まるのはメカニズムからの必然的帰結である。一方、寡占的状況が強まるにつれ、直接的な需給均衡メカニズム以外の原理で決定される偶然的要素の占める割合も増大する。またこの均衡価格がある特定の目的のために外部から歪められるかもしれない（例えば政府の価格規制）。それは均衡価格の持つ自由性に対する抑圧として描き出せるであろう。

この交換システムとは対置されるのが脅迫システムである。これは「もし君が僕に何か良いことをしてくれないならば、僕は君に何か悪いことをしてやる」という命題に基づいている。ボールディングは政治権力は基本的に脅迫システムに基づいていると考えている。確かに、古代から現代に至るまで国家が体制を維持するために懲罰システムを利用してきたことは明らかである。われわれの社会は、交換システムを原理とした経済と脅迫システムを原理とした政治によって構成されているのだが、それらの関係に複雑性を付与しているのが学習システムである。学習システムは、われわれに他のシステムを制御し、運命に抗うような力を与えている。しかし、同時に学習による変化があまりにも速い分野においては予測を不可能にし不確実性を生み出すこともある。彼は、我々の住む社会を制御するために、これらの四つのシステムが織りなす微妙な綾（あや）を理解しなければならないと考えた。例えば、脅迫システムのみに重きをおいた社会主義は正常な社会を維持できないのである。

ボールディングの社会システム理論を象徴するもう一つの言葉は「*エントロピー」である。ボールディングは消費活動を秩序あるものの無秩序化として捉え、エントロピー増大の過程と考えた。逆に生産過程はエントロピー減少の過程として描かれる。生産と消費は必ず対になっており、全体としてはエントロピー増大へと向かうのが我々の消費社会である。ボールディングは後に、このエントロピー経済学に倫理的な意味を付してしまうのだが、それは適当ではない。しかし、経済学を、時間の経過の中でエントロピーの増減の過程として捉え得るものが多いことは確かである。

本書の中には、M・フリードマンとの対談を元にしたエッセイが含まれている。その中でボールディングはおおよそでフリードマンの自由主義に同意しているのだが、その背景になっているものはフリードマンのそれとは同じではない。メソジスト教徒でもある彼の経済学者としての信念は、あくまで個々の人々が忘れ去られることのないような経済学を創ることなのである。**（江頭 進）**

翻訳●公文俊平訳『経済学を越えて』（竹内書房、一九七〇年）／参考文献●槌田敦著『熱学外論』（朝倉書店、一九九二年）

エントロピー
ドイツの物理学者クラウジウスは、物体の温度とその物体に流れ込む熱という基礎的な二つの量から物体の状態を表すもう一つの量を発見し、それをエントロピーと呼んだ。熱は次第に拡散してしまうのでそれにつれてエントロピーは増大する。したがって熱学的にはエントロピーは「拡散の程度を示す定量的指標」（槌田敦）として考えることができる。ボールディングはエントロピーの概念を経済学の中に持ち込んだ最初の経済学者である。彼の議論は当初はかなり正確なものであったが、後にエントロピーを倫理的な意味合いをもった「社会の混乱の程度」として使うようになってしまい、誤解の多い議論を生むことになってしまった。